文化

いじめ・自殺、学校の外へも目を

相模原市の知的障害者施設殺傷事件

社会に隠された優生思想の表出

作家・詩人　辺見庸さんに聞く

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が16日、元職員の植松聖被告に判決を言い渡す。検察側の求刑は死刑。事件を契機に小説「月」を執筆、死刑制度に長年、強く反対してきた作家で詩人の辺見庸さんに聞いた。

▲殺傷事件が起きた知的障害者施設「津久井やまゆり園」＝2016年、相模原市緑区

破綻していた「人間平等」の前提

この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の上で、非常に大きな出来事だと直感しました。「人間は平等であり、人権は守られる」「人を差別しても、されてもいけない」といった言わずもがなの前提が私たちの内面でとっくに破綻していたことを、あらわにしたからです。

「存在してもいい人間」と「存在してはいけない人間」を選別する―。植松被告、私は「さとくん」と呼びますが、彼はそういう論理で重度障害者たちを殺していったとされている。裁判所がもし、死刑判決を下すとしたら、その瞬間に司法は「さとくん」と同じ論理に立っていることを、最も単純な形で証明することになる。

私は「月」という作品で「世の中をよくしなければならない」と考える「園」の職員「さとくん」と、目が見えず歩行ができず、しかし自由に「おもう」ことができる入所者「きーちゃん」という人物をつくりました。きーちゃんは痛みの中で「なぜ、在るのか」と考え続けます。私たちが「存在してしまう」ことは、主体的にあるのではなく「気付いたらそうだった」という偶然によるものです。

辺見庸さん

へんみ・よう　1944年宮城県生まれ。共同通信社で北京特派員、ハノイ支局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。「自動起床装置」で芥川賞、「もの食う人びと」で講談社ノンフィクション賞、「眼の海」で高見順賞、「増補版1★9★3★7」で城山三郎賞。他に「赤い橋の下のぬるい水」「青い花」「純粋な幸福」など著書多数。

「ハートウォーミング」の偽装

意志とは関係なく「在ってしまう」という実存について、私たちはとりあえず「そういうものなのだ」と引き受けるしかない。他人が「在る」「ない」を決めることはできません。けれど日本社会では長く強制不妊が行われ、今は出生前診断で「命の選別」をしている。「選別」の射程を広げれば、企業では人事評価で「良い社員」かそうでないかをより分けている。強い者と弱い者、美しい者と醜い者、「正気」な者とそうでない者…。あらゆる場所に優生思想が染みわたっている。

ところが日本社会は、重度障害者に優しいかのような偽装をしています。たまにテレビに登場させれば「ハートウォーミング」な文脈に回収してしまう。重度の障害がある人、その保護者が抱える重さはとてつもないもので、それに見合うリアリティーが番組には全く欠けています。

本当は自分の周囲から排除している人、見ないようにしている人々、忘れようとしている人たちを、「共生」「絆」などと軽々しく肯定する言葉だけはたくさんあります。それはおためごかしというものです。

「存在」を消したい悪意の「本音」

都合の良いものだけに囲まれて生きていたい、「存在」を意識から消したい―えたいの知れないそんな「本音」が、底知れない悪意の沼のように横たわる日本社会の基底に、相模原の事件は太いくいを打ち込むような出来事でした。なぜなら、この時代と社会に静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表出したからです。その意味で「さとくん」は「社会的産物」であり、事件は「一人格の問題」ではない。彼をエキセントリックで例外的な人間だというふうに扱えば扱うほど、事件の真相からは離れていく。

「さとくん」は施設で働いている時、障害者を取り巻く暗い風景に傷ついたのではないか。それを自分で対象化し、消化することができなくなったのではないか。すさまじい暴力を発動させた背後には、社会が抱える優生思想があった。彼個人の属性によるものではなく、その暴力は社会にぴたりと同調していた。

「さとくん」は、暴力に突き進んだ時の論理を、「そうではないのかもしれない」と保留することができなかった。何かを保留すること、抑制するには骨組みのしっかりした知性が必要です。それは「世間」や「社会」に同調せずに「個」として生きようとする態度にも関わる。生き方における峻厳さが問われることです。死刑制度には、問われる罪に関わりなく、無条件で反対です。国家による殺人という意味では戦争と同じであり、それを容認することになる。死刑は「暴力を内包した国家」を成り立たせているものなのです。

「月」の表紙

「月」

寓意に満ちた叙事詩としても読むことができる長編小説。2018年に出版された。

物語は「園」に入所する「きーちゃん」の独白を基調に進む。全く動けず、目が見えず、思うように話せないきーちゃんは、自分を見た者が「ありきたりの〈善意〉」から発する「おさだまりの文言〈オキノドクニ…〉」や「あからさまな嘆息」で自身の姿を想像する。

「在りつづける」ことを誰かに請われているわけでもなく、誰にも分かってもらえない痛みを抱えながら「在る」ことを考え続けるきーちゃんは「だれよりもそっちょく」な職員「さとくん」に心を許している。だが「さとくんはある日「〈敵対者〉の空気」をまとってやって来る。

ゆる面に目を向けないと問題解決は前に進まない」と話す。

映画は北関東のある街を舞台に、急ピッチで

「リアルすぎる」との声があがるほど、現場関係者からは明かされない社会の実態をあぶり出し

NTTタウンページ
Digital Lead
Powered by WiX

専門的な知識がなくても、時間や人手をかけなくても、
WEBで簡単に集客・顧客管理ができます。　(金額はすべて税込)

集客数アップにつながる、
洗練されたホームページを制作

OPEN　ホームページ立ち上げ時や

常時SSL化でWebサイトの